

# 最初に知っておきたいこと

## 1-1 必要な栄養素の違い

- 私たちと同じように、犬や猫は、たんぱく質、脂質を始め、炭水化物、ミネラル、ビタミンなどの栄養素を食べ物から摂り入れなければ健康に生きることができません。
- しかし、犬と猫では、必要な栄養素の割合に大きな違いがあります。

### 犬は雑食

犬は、人と長い間、共同生活していく中で雑食性が進みましたが、人よりもたんぱく質を多く必要とします。



### 猫は肉食

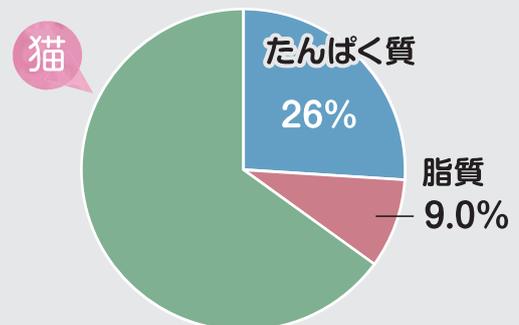
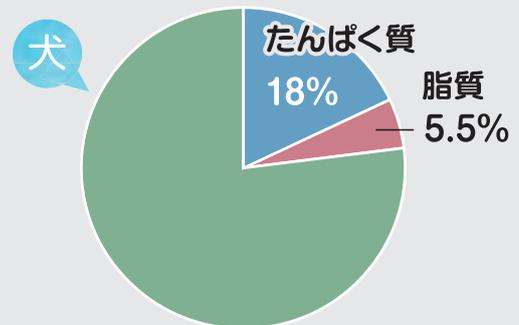
猫は、人と暮らし続けていても肉食性を保ち続けたため、人や犬に比べてたんぱく質を多く必要とします。



### 犬と猫の平均的な食事に含まれる栄養素含有量の比較

(乾物、代謝エネルギー4kcal/gの場合)

< AAFCO Official Publication 2016 >

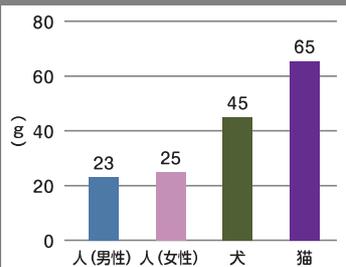


### 1,000kcalの食事に含まれるたんぱく質の推奨量の比較

データ

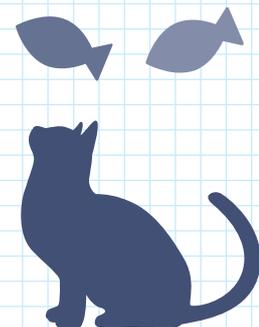
[人]  
日本人の食事摂取基準(2015年版、厚生労働省) 30~49歳

[犬・猫]  
米国飼料検査官協会 (AAFCO) Official Publication 2016



### MEMO 猫のタウリン欠乏症

猫は、人や犬と違い、タウリンを体内で十分に合成することができません。タウリンが不足すると、猫では、眼の障害(網膜萎縮)や、心臓の疾患(拡張型心筋症)などを引き起こすことがあります。手作りフードを利用する場合などでは注意が必要です。タウリンは、魚介類や動物の内臓などに多く含まれています。



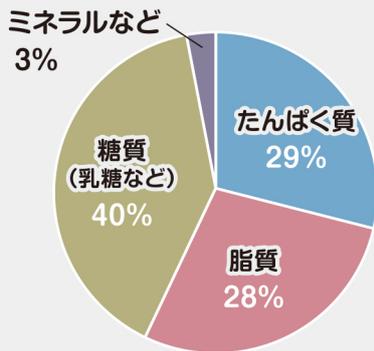
## 乳の成分



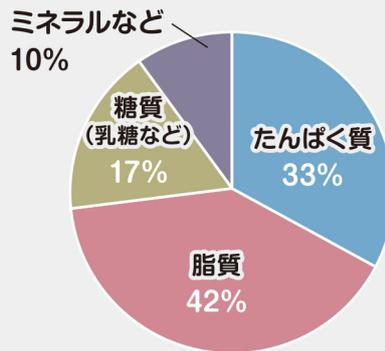
牛乳はカルシウムなどのミネラルや多くの栄養素を含み、私たち人間にとって良質な食品の一つです。しかし、犬や猫の母乳は牛乳に比べてたんぱく質や脂肪の量が多く、乳糖などの糖質や水分が少ないのが特徴です。

このような違いから、子犬や子猫に牛乳を与えると、水分が多く、脂肪が少ないためにエネルギーやたんぱく質が不足し、健全に成長できないことがあります。また、成犬や成猫に乳糖を多く含む牛乳を与えると、乳糖をうまく消化吸収することができないため、下痢を起こすことがあります。

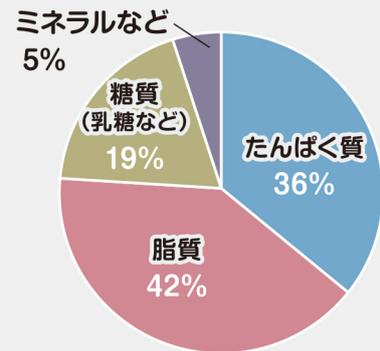
【牛乳】



【犬の母乳】



【猫の母乳】



牛乳、犬の母乳、猫の母乳の成分量 (乾物、%)

## 1-2 塩分・糖分について

●塩分・糖分の摂りすぎに注意が必要です。

### 塩分

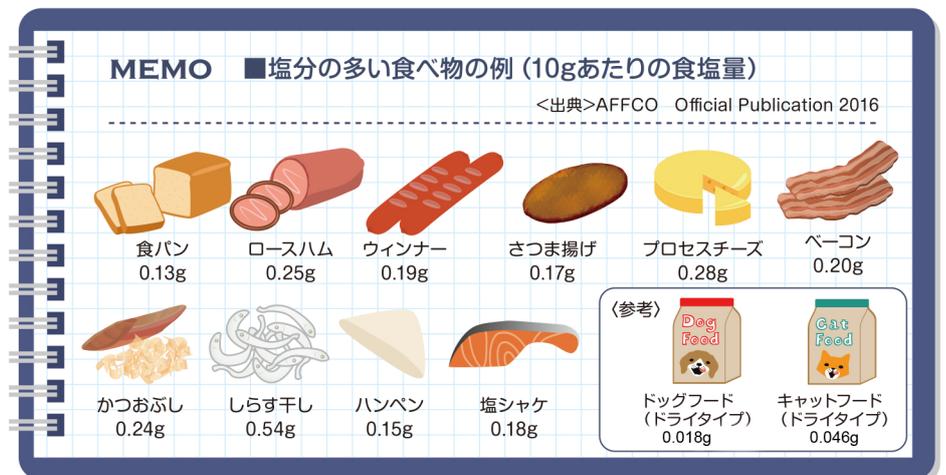
人が味付けをしている食事、総菜、ハムなどを犬や猫に与えてしまうと、塩分摂取量が過剰となることがあります。塩分の摂取過剰は人と同様に心臓や腎臓に負担をかけてしまうこととなります。そのため、チーズ等を与える際は犬猫専用のものを与えましょう。

体重5kgの  
犬猫 (避妊去勢済み) の  
1日の塩分摂取量の目安

犬	猫
0.18g	0.33g

<出典>AFFCO Official Publication 2016

※体重5kgの犬猫 (避妊去勢済み) の1日当たりのエネルギー要求量 (P.13) をもとに算出。



### 糖分

犬は甘みのある食べ物が大好きです。肥満などの原因になるため砂糖や果物の与えすぎには注意しましょう。

猫は甘みを感じることができず、フルクトース (果糖) を代謝する酵素も持っていません。

## 1-3 フードの与え方

●犬と猫にはフードの食べ方に違いがあります。犬や猫それぞれに合った方法でフードを与えましょう。

### 犬の場合



犬は、1回で1日分のフードを食べることが出来るほど大きい胃を持っているため、目の前にあるフードをお腹いっぱい食べる習性があります。

与える回数が1日1回の場合、慌てて飲み込んで、のどに詰まらせたり、肥満の原因になることから、1日分を数回に分けて与えるようにしましょう。

市販のペットフードの場合には、パッケージに表示してある給与量の目安や与え方を参考にしましょう。

### 猫の場合



猫は、昼夜を問わず頻繁に少量ずつ食べる習性があります。1日分のフードを2～3回に分けて与えるか、ドライフードを置いておき、いつでも食べることができるように工夫しましょう。ただし、フードを置いておく場合は、常に清潔にし、定期的に交換するようにしましょう。

水分の多いウェットフードや手作りフードなどは、品質の低下が早いいため、そのまま置きっぱなしにせず、食べ残しはすぐに片付けましょう。

### MEMO 飲み水

水は犬や猫の体の60～80%を占める重要な要素です。

体に必要な水分のほとんど(90～95%)は、飲み水及びフードから摂取されます。実際には食べているフードの種類や、気温、運動量などによっても大きく左右されるので、いつでも新鮮な水が飲めるように用意しましょう。

特にドライフードは水分含有量が少ないため、ドライフードを与えるときは必ず新鮮な水をフードのそばに置いておきましょう。また、猫にドライフードを与えるときには飲み水を複数箇所に置くことがおすすめです。

## 1-4 与えてはいけないもの、注意が必要なもの

●人の食べ物でも、犬や猫には害を及ぼす場合があります。タマネギやチョコレートなどを犬や猫に食べさせてはいけません。

### × 与えてはいけないもの

#### ■タマネギ・ネギ・ニラ・ニンニク



タマネギなどに含まれている犬や猫に有害な成分（アリルプロピルジスルフィド）が赤血球を破壊し、犬や猫が大量に食べると、血尿や下痢、嘔吐、発熱などを引き起こすおそれがあります。加熱してもこの成分は分解されず、ハンバーグやカレーなどのタマネギが含まれる加工食品、また、タマネギそのものではなくても、エキスがしみ出た味噌汁やすきやきの煮汁など与えてはいけません。（同様の成分は、長ネギ、ニラ、ニンニクなどにも含まれています。）

#### ■チョコレート



犬にチョコレートを与えると、テオブロミンが原因で嘔吐、下痢、発熱、けいれんの発作などを引き起こします。また、猫でも同様の症状を引き起こすことがありますのでチョコレートを与えてはいけません。室内飼育の場合には、買い置きのチョコレートなどを部屋に放置しないようにしましょう。

#### ■キシリトール入りのガムなど



キシリトールは、虫歯予防などに有効として人間用のガムや歯磨き粉などに含まれていますが、犬が食べてしまうと、少量でも、血糖値の低下や嘔吐、肝不全などを引き起こすので与えてはいけません。

#### ■鶏の骨



鶏の骨は縦にさけやすく、噛んで割れるととがった形状となり、のどや消化管を傷つけることがあるため、犬や猫に与えてはいけません。

#### ■生の魚介類 (魚・イカ・タコ・エビ・カニ)



生のイカや貝などの魚介類や、カニ、エビなどの甲殻類はビタミンB1を分解する酵素を持っているため、猫に与えると体内のビタミンB1が欠乏して後脚の麻痺を引き起こします。魚介類は必ず加熱調理をして与えるようにしましょう。

#### ■ブドウ・干しブドウ



犬や猫にとって腎不全の原因になります。特に、ブドウの皮は与えてはいけません。

## △ 注意が必要なもの

## ■ レバー



ブタやニワトリなどのレバーにはビタミンAが多く含まれており、犬がビタミンAを過剰に摂取すると、食欲不振、関節炎を引き起こすことがあります。また、猫でも同様に注意が必要であり、レバーを与えすぎないようにしましょう。

## ■ ホウレン草



シュウ酸が多く含まれているため、シュウ酸カルシウム尿石症の原因になります。茹でてアク抜きをすることで、シュウ酸の量を減らすことができます。

## ■ コーヒー・緑茶・紅茶など



カフェインが含まれているため、これらの飲料を与えると、犬や猫は下痢、嘔吐、体温不調、多尿、尿失禁、テンカンの発作などを引き起こすことがあります。

## ■ 生肉



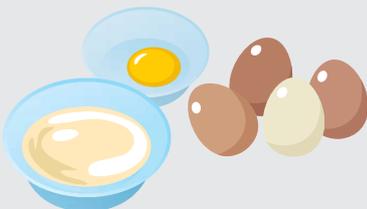
生肉（生の豚肉や野生鳥獣肉）には有害な寄生虫や細菌が存在する可能性があるため注意が必要です。犬や猫に肉を与える時は加熱調理を行い予防しましょう。

## ■ 香辛料



犬や猫は、香辛料に対する耐性が低いので肝臓障害の症状を引き起こすことがあります。

## ■ 生卵（生の卵白）



犬や猫に生の卵白を与え続けると、ビオチンが欠乏し皮膚炎、成長不良の症状を引き起こすことがあります。

ただし、卵白のみを与える場合でも、加熱調理をすれば問題はありません。また、生であったとしても、全卵であれば、卵黄にビオチンが多く含まれますので欠乏症にはなりません。

## ■ にぼし、海苔



犬や猫には、マグネシウムの過剰が要因となり尿路疾患を引き起こすことがあります。